

天声人語

80年前、少年向けに書かれた本が今年、新たな装いで刊行された。吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』。活字版と漫画版で計100万部に達したそうだが、読者の心をつかんだのは何か▼「不安の広がる時代だからでしょうか」と出版元のマガジンハウスの鉄尾周一さん(58)。気まぐれな大国に振り回され、隣国からミサイルが上がる。暮らしの先行きも読みにくい。なるほど不安材料は尽きない▼驚くのはこの本が1937年に刊行されたことだ。夏に盧溝橋事件が起き、前年に2・26事件が社会を震撼させた。政党政治は挫折し、軍国主義が時代を圧してゆく▼吉野はこの本を出す6年前、治安維持法違反で検挙されている。軍法会議で「君たちが何と言っても地球が太陽の周りを回る」と述べたとも伝えられる。親友の哲学者古在由重(よしむね)の『暗き時代の抵抗者たち』にある。吉野は1年半、投獄された▼『君たち』の主人公は「コペル君」。16世紀の天文学者コペルニクスにちなむ。天動説が不動の常識だった時代に地動説を唱えた。「自分が宇宙の中心という考えにかじりつく」と真理は見えてこない」とコペル君は学んでゆく▼改めて世界を見回せば、「地動説」が揺らぎ、「天動説」が頭をもたげる。米国のみならず、自分を宇宙の中心と考える指導者がいる。温暖化対策ひとつを見ても、言動が自己中心化し、天動説化している。大勢に流されず、強者にひるまず、自分で考える。今こそコペル君の勇気が必要ではないか。